

経営情報学会 2024 年度年次大会報告

高木俊雄（たかぎ としお） 横浜市立大学

1. 大会概要

2024 年度の年次大会が、2024 年 6 月 1 日（土）に Zoom とバーチャル空間の oVice を使って行われました。大会テーマは「人と技術から生まれる経営」であり、株式会社ネオレックス CEO 駒井研司氏を招待講演者としてお招きして講演をいただきました。また学会賞受賞者講演セッションとポスター発表セッションも設定しました。

大会申し込み者数は 207 名であり、またポスター発表は 40 件と多くの方々に参加していただきました。実施方法は 2023 年度と同様に招待講演と学会受賞者講演は Zoom、ポスターセッションは oVice で行いました。

2. 招待講演

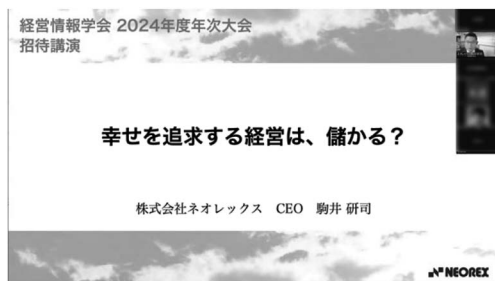
招待講演では、株式会社ネオレックス CEO の駒井研司氏をお招きし、「幸せを追求する経営は、儲かる？」のタイトルで講演いただきました。ネオレックス社は、「日本でいちばん大切にしたい会社大賞」において審査員会特別賞を受賞するとともに、クラウド勤怠管理システムでは大規模市場で 10 年連続で国内トップシェアを誇っています。今回、従業員および顧客の幸せと企業業績との関係についてお話をいただきました。

ネオレックス社は 1987 年に愛知県で創業された ICT ベンチャー企業で主にクラウド勤怠システムや、iPad 向け勤怠アプリを提供しています。ネオレックス社の特徴として、「追いつけない営業」があります。これはネオレックス社から積極的に営業を行い、システムを導入してもらっても長期的な取引とはならず、その結果、十分な売上とはならないという理由のためとのことです。一方で納得してネオレックス社のシステムを導入した企業に対してはサポートやフォローを行うことでユーザー満足度を高め、長期間にわたる取引となることが多いとのことです。

このことは新卒採用においても同様となっており、採用過程においても美辞麗句を使った説得を学生に行うことを行わず、また内定者フォローも行わないという特徴があります。学生が自身でしっかり考え、そのうえでネオレックス社を選ぶかどうかを決めてほしいとの思いを駒井氏はもっています。なお社員の多くは ICT に関する専門教育を受けてきた者ではないため、入社後に数多くの学習機会を提供しているとのことでした。そのほかにもフレックス制度やテレワーク、さらにはニーズに応じて育休や時短勤務も提供することで社員の満足度を高めるようにしています。

このようにネオレックス社には、従業員と顧客の幸せを追求することで、結果として儲かるという経営になっているという特徴があります。

このような駒井氏の講演に対して、フロアからは経営方針や今後の展開など、さまざまな質問が出されました。駒井氏の講演は単に技術を用いて新製品を提供し企業業績を高めるということではなく、従業員と顧客の幸せを追求した結果として売上の向上が得られたという点において、本大会テーマである「人と技術から生まれる経営」と非常にマッチした内容であったかと感じます。



駒井研司氏による招待講演

3. 学会賞受賞者講演

学会賞受賞者講演セッションでは、今回、経営情報学会 2023 年度論文賞を受賞した論文「ライフプランニング検討に向けたシミュレーションベースの定量的ペルソナデザイン」(『経営情報学会誌』 Vol. 31, No. 4)

について、菊地剛正氏（慶應義塾大学）および高橋大志氏（慶應義塾大学）から講演をいただきました。

発表および「論文賞受賞報告」（『経営情報学会誌』Vol. 32, No. 3）によりますと、本論文は退職後のライフプランニングに関心がもたれている近年において、資産形成サービス提供者は適切な顧客像とそのニーズを把握することが必要となっています。しかしながら、ライフプランニングのような便益遅延サービスにおいては、その顧客像やニーズは過去および現在のみならず、将来変化についても把握することが必要となっており、この「将来」の変化についてこれまでの研究では十分に検討がなされていないという問題意識を菊地氏、高橋氏はもち、本論文の執筆に至ったとのことです。そのうえで、実データに基づく社会シミュレーションにより顧客の将来属性を生成し、仮想空間上のシナリオ分析を通じて施策効果を把握することを行っております。

本論文は、ライフプランニングにおける新しい視点の提供はもちろんのこと、他の便益遅延型のサービスを提供している事業者においても有用な視点を提供しており、学会賞としてふさわしい論文であると感じました。

4. ポスター発表セッションと学生萌芽研究部会ブース

ポスター発表セッションでは、先にも示しました通り40件の発表が行われました。またポスター発表者のうち希望する者に対して優秀萌芽研究賞の審査が行われました。このセッションは昨年度と同様に、新進の研究へのフィードバックを提供し、それにより秋の全国研究発表大会に向けて研究を深めるきっかけを創出することを主な目的として実施されています。

多くの方々が本セッションに参加していただき、非常に活気にあふれたものとなりました。また発表は、文化人類学や社会学で検討が重ねられているアクターネットワーク理論を用いた地域活性化の研究、SDGs ビジネスの市場評価分析、M&Aと企業の価値創造との関係など、多岐にわたるものでした。

今回もoViceを使用した開催形式であったため、参加者は気軽に各種のポスター発表を巡ることが可能となり、さまざまなプレゼンテーションを聞き、また発表者と交流する機会を得ることができました。



ポスター発表セッション

ポスター発表セッション後の審査の結果、以下の2報告が優秀萌芽研究賞を受賞することとなりました。

- ・野中 誠氏（東洋大学）、杉原 碧氏（筑波大学）「DX先行企業は非先行企業に比べて高いROEを達成できているのか？—卸売業・小売業、製造業（機器、素材）、情報通信業の比較—」
- ・野田蒼斗氏（東京理科大学）、大江秋津氏（東京理科大学）「防御型経営戦略がもたらす労働災害の改善」

また、今回も前回と同じく、ポスターセッションでは学生萌芽研究部会のブースを設けることにしました。この部会の目標は、学生会員間のネットワーキングと交流を通じてさまざまな革新的な研究を生み出すことです。多くの学生がポスターセッションに参加することから、部会メンバーと他の学生会員との交流の場を提供するためにブースを設けることにしました。

5. おわりに

2020年度以降、年次大会はオンラインでの開催となり、また2021年度から講演会とポスター発表セッションの2本立での開催、そして昨年度からはZoomとoViceでの開催と、毎年、試行錯誤を重ねつつ大会を運営しています。また、皆様の協力があり、昨年、そして今年とポスターセッションでは多くの申し込みをいただくことができました。ただ、新たなチャレンジをしていることから、参加者の方々にはご迷惑をおかけした点もあるかもしれません。機会がございましたら、年次大会の感想などを大会担当理事に寄せていただければ今後の参考とさせていただきます。今回の大会は講演者、発表者、参加者、そして準備に関わってくださった多くの方々のご協力によって無事終えることができました。この場をお借りして、大会に関わってくださった皆様に御礼申し上げます。